

城と水

日本各地に水濠や石垣に囲まれた城跡が数多く残されている。講演等で日本各地を廻る筆者は「水商売」だけに、城跡を見ると常に飲料水の確保はどうしていたのか、また使われた排水は何処に流れてゆくのか気にかかる場所である。電気もない、配管もない時代にどうやって良質の飲料水と大量の用水を確保したのか、わくわくする想像の世界が待っている。

今回は日本の城作りと水との関係について考えてみたい。

城の役割

いうまでもなく、戦いの為の権力の象徴であり、もちろん敵を防ぐ砦であり、また生活の拠点として築かれたものであった。城作りの歴史は古く、遠く上代まで遡るが、土塁、石垣、柵、井戸などの遺跡構造物が残され当時が偲ばれるが、必ずしも実態は明らかではない。勿論、当時の最高機密に係る「城作りの図面や指南書」も保存されていない、大きな城になると必ず多くの井戸が城内にあり、命に係わる飲料水の確保だけではなく、井戸の中の横穴はいざという時、殿様の最後の脱出口でもあった。当然その存在は知られてはならない。井戸工事に関係した人足は、

完成時に「馳走と酒（毒入り）」が振る舞われ、口封じが行われた。

山城（やまじろ）の構築

城の役割として南北朝の動乱期には、純粹に軍事的な砦として発展した。敵の攻撃に備え、敵が容易に攻め登れないような険しい山上に築城した。道は険しく、迂曲した道があり、背後に急傾斜の断崖があるところが山城の最適地であった。

しかし最大の問題は、飲料水や用水の確保であり、特に城内の用水の枯渇を防ぐために地形に応じた様々な工夫がなされ、水の確保が城の運命を左右した。

有名な「太平記」には、楠正成（くすのき まさしげ）が河内の山城である赤坂城や千早城に立てこもり、様々な奇策を用いて敵と対戦したことが記載されている。

元弘元年（一二三二年）、正成が旗揚げした赤坂城は「三方ハ崖高クシテ屏風ヲ立テタルガ如シ」と描かれ、天然の要塞であった。さらに濠を広く深く掘り、崖の上には土塀を塗り固め、その上に櫓を建て並べ見張り、敵にとり攻め落とすことは容易でなかった。

赤坂城の戦い、正成は凡そ五百の軍勢で、かたや二十万から三十万人の鎌倉幕府軍であった。誰も目からみても正成に勝ち目がなかった。

正成の奇策

正成の奇策は多くの軍記物に描かれている。例えば急峻な崖を集団で登ってくる軍勢をとことんまで引き寄せ、雷鳴の如く弓矢を放った。崖をよじ登っていた敵の大軍勢は避けきれず、先頭の兵が転げ落ち、重なりあった兵が兵を巻き込み谷底に転げ落ち、初日で千名もの兵が命を失った。二日目、幕府軍は慎重になった。城内の様子を伺いながら崖をよじ登ったが、弓矢は飛んでこない。寄せ手は思った。「どうやら敵は初日で弓矢を使い果たしたようだ」と。勢いづいて大勢



よしむら かずなり
吉村 和就

（グローバルウォータージャパン代表
国連アケニカルアドバイザー）

の兵が崖を登り始めた。一部の兵は城の間際まで到達した。その時、城内から「放てー」との声が響いた。兵は首をかしげた。

「放てー何を放つのか？」次の瞬間に城壁から丸太や大きな石が豪雨のように降ってきた。たちまち七百人以上の兵が谷に討ち落された。

だが敵も馬鹿ではなかった。今度は矢を防ぎ、足場を保てる櫓を持たせ、分散して崖を登らせた。矢も飛ばず、丸太も石も転がってこなかった。「今度こそ」と、勢いづいた兵が城壁に差し掛かる頃、悲鳴が上がった「アッチー、熱湯か、これはなんだ、この臭いとヌルヌルは？」城内から、煮えたぎった糞尿の雨が降り注ぎ、糞尿のぬるぬるで足場を失い多くの兵が転げ落ち谷に消えた。煮えたぎった糞尿では、櫓も全く役に立たなかった。谷に落ちてゆく兵が「クソー」と言ったかどうか定かではない。

本題に戻そう。

城と水源

敵方の指揮官である北条貞直は、正面からの武力のみでは簡単に攻め落とせないとみるや、この城の弱点を徹底して探した。城の三方が深い谷であり、前面は平地で、水源である山は遠くにしかない。水源が乏しいに違いないと見るや、火矢による火攻め攻撃を試みたが、火矢を打ち込むとすぐに水弾き（当時の火消し道具）で消されてしまう。

雨が降らないのに、なぜ水が豊富にあるのか、どこかに埋設された水路（樋）があるのに違いないと推測し、人夫を集め山城の麓を掘りかえしてみると、案の丈、地下二丈余り（約六メートル）の所に樋が埋めてあった。樋の脇に石を積み、その上に水に強い檜（ひのき）の蓋をして土をかぶせ、十町余りの遠方から水を確保していたことが分かった。

そこで北条勢は、樋を破壊し水を止めてしまった。当然、城の中は水が乏しくなり、城の中の

軍勢は口の渴きに耐えかねて、城内の草木の葉におりた朝露まで舐めたが、しかし雨は降らなかつた。攻め手の軍勢はこれに勢いづいて絶え間なく火矢を射掛けて表門の二つの櫓を焼き落とした。城内の軍勢は二週間以上も水を飲めない日々が続き、精根尽き果てた。赤坂城は水を絶たれて陥落したが、正成は逃げ出すことに成功した。

千早城の水源

赤坂城が落城してから一年余りで正成は、さらに山奥の千早城にて、再び旗揚げをした。ここは金剛山につづく峻しい嶺の上であり、東西が深い谷になっている。容易に敵兵が近づける城ではなかつた。敵方の武将はまた思案をめぐらした。この前の赤坂城を攻め落としたのは、水脈である樋を破壊し、敵の息の根を止めたのであつたが、今目の前に聳えた千早城は山の上で十分なる井戸水の確保が不可能であり、他の山からの取水も不可能である。しかし城の中には潤沢な水が貯えられているようだ。

「なぜだ、そうか、夜な夜な兵が谷川の水を汲みにきているに違いない」と思い城から谷に続く道の途中に屈強な兵を配置し、夜な夜な監視させたが誰も水を汲みに来なかつた。

正成は、この城を築く時に、用意周到に水源を調べさせた。この山には湧水がある事が分かり、事前に大きな水槽（樽）を三百以上作らせ、水を貯めていた。それだけでは、各々の樽を竹の配管でつなぎ、陣屋の屋根に降った雨水を一滴残らず樽に貯水できる構造にした。しかし水は貯めれば腐るので、樽の底には赤土を敷き詰め水質が変化しないように工夫した、水は城の命である。

一方敵方では、水汲みに降りてくるのを「今か、今か」と待っていたが、兵はだれも降りてこない。しまいに気が緩み警戒もおろそかになった頃に、正成軍勢は屈強の射手二、三百人を揃え、その道をかけ下り、夜陰に乗り敵陣を攻撃、ふいを突かれた敵兵は総崩れになって元の陣地

に退却したのであった。

築城記

越前国『朝倉家の家訓』にも山城築城の心得が述べられている。

山城というものは、それ自身十分なもの様に見える。しかし、水がなくては結局無意味なので、決して水の手を遠くに置いてはならない。また、水がある山でも尾根を掘り切つて、水脈の近くの大木を切つてしまい、その後水が出なくなってしまうことがある。よくよく水のことを考えて山城を造るべきである。

繰り返すが、水のこととは肝要であるので、分別をわきまえるように。末代まで人々の命を延ばすことこそが、山城の徳というものだ。城主も天下の名声を得るものだ。日夜心身を砕いて築城することが肝心であると。

平山城（ひらやまじろ）の登場

やがて時代が変わり軍事だけの山城では、領内の政治経済の中核になれず、要塞の地を離れ交通の便利な平野部に居城を築くようになった。江戸城は武蔵野台地の末端と山地と平地の両方の利点を巧みに利用した平山城であった。全国各地に平山城は存在するが、江戸城に関しては築城までの歴史や、城の構造などが歴史的な文献に書き残されており、容易に推測できる城である。

江戸城は平安から鎌倉時代にかけて江戸氏により築かれたと言われている。しかし、さびれた沼や草地に囲まれた江戸城は戦国武将にとり、まったく魅力のない城であった。

江戸氏の没役の後、本格的な築城は元禄元年（一四五七年）太田道灌の手で行われた。道灌は湿地での城作りが得意で、現在残る江戸城の石垣の下には、多くの松丸太が使われている。江戸初期の井戸水は、湿地であったので水質が悪く、しかも塩水が混じることもあったが、台地（現

在上野、本郷、小石川、牛込、麴町、麻布、白金など）に囲まれた江戸城は、上水の確保にも有利な地であった。

江戸城と水

なぜ徳川家康が、江戸に興味を持ったのか、水の観点から見よう。そもそも江戸の地は、前に述べたように周りは湿地だらけで竹や葦の生い茂る荒れ果てた土地であった。家康に影響を与えた人物の一人に天台宗の実力者であった南光坊天海がいる。天海和尚は全国各地で修業し、風水にも明るく、時の実力者、例えば武田信玄なども親交があった。信玄は治水の神様と言われるほど治山治水の造詣が深かった。天海、天正十六年（一五八八年）に武蔵野国川越の無量寿寺北院に移り、やがて家康の信頼を経て、「江戸の街づくりの参謀」として活躍した。関ヶ原の戦いに勝利した家康は江戸幕府を開くために天海に下見をさせている。

天海は天文や方術など陰陽道の知識が豊富で、その知識を駆使して西は伊豆から、東は下総（千葉県）までの広大な地形と地相を調べ、家康に、この地が幕府の根拠地としてふさわしいと進言したと言われている。湿地を改良し水路を整備し、舟運による商業の発展も含まれていた。家康はこの江戸城を大改修するために全国二十八大名に命令を発し、各大名は自前で資金や物資を提供させられ江戸城の普請が急ピッチで行われた。すべてが完成したのは四十年後とも言われている。「静勝軒詩銘」によると初期の江戸城、石垣の高さはおよそ二十〜三十メートルで、湿地に強い松丸太（杭と筏）の上に石垣が積まれている。その周りには土堤をめぐらし、崖下は深い濠となって湧水が流れ出ていた。城内には五〜六の深井戸があり、干ばつの時でも水の枯れることがなかった。

江戸の城下町には、小石川上水、神田上水、玉川上水が開設され、江戸の発展を支える礎となった。